

パラナから来た翻訳者

笠戸丸が最初の日本人移民をサントス港に運んで、今年でちょうど100年になる。

ブラジルは今や日本以外で最も多くの日本人が住む国となり、その数も130万人に達した。一世時代の日本人社会は、暗く悲しい物語に満ちた農業と商業が主流であったが、二世、三世と世代が下るに連れ、高等教育を受けた彼らは次第にブラジル社会の隅々に浸透するようになり、政治、経済、学術は基より今日では文化領域の最も奥に位置する芸術界にも専門家が誕生するようになった。

ラテンアメリカ諸国の中で、最も広大な国土を有し、農産物や鉱石などの生産国として知られていたブラジルではあったが、これまで芸術文化の面ではアルゼンチン、メキシコに水をあけられていたのが実情であった。しかし、1951年にスタートした“サンパウロ ビエンナーレ”は、回を重ねる毎に、芸術後進国のブラジルに大きな収穫をもたらし、今日、ラテンアメリカ美術を語るとき、ブラジルがその筆頭に上げられるようになったことは誰も否定できない事実である。

ブラジル国内での芸術文化が話題になるとき、これまでは常にリオであり、サンパウロであった。近年、首都ブラジリアや南の大都会ポルトアレグレが、注目を浴びるようになってきたが、その後を追って実力をつけてきたのが、今回の主人公、上西エリカが活躍するクリチーバ（パラナ州都）である。彼女は、サンパウロ州に次いで日系人が多いパラナ州のロンドリーナ市で育ち、高校卒業後に一時来日して陶芸を学んだが、その後再びブラジルに戻って、本格的な美術教育を受けるため、パラナ州立大学美術学部に入學した。同学部を無事卒業した上西は、今度は我が国の文部科学省の留学生として再来日し、現在は日本大学芸術学部の院生として、映像表現について研鑽を積んでいる。

上西作品の特徴的傾向は、文字によって構成していく画面である。形態としては、大体がシンプルなフォルムを持った抽象であるが、それらは重複したり拡散したりしながら次第に有機的な形を持った連鎖状態になっていく。一見、曲線によって連続する色面だが、近づいて良く見ると、驚いたことにこれらはボールペンやカラーインクをペンで書かれた文字であることが分かる。きっちりと書き込まれた文字の配列は、ただならぬ緊張感と職人芸を思わせる高度な技術力を見てとることができる。この線描から成り立つ技法から言って、この作品は「ドローイング」と分類していいであろう。しかし、此处で言う線描とは、単なる線ではなく、「文字」である。作家は表現の出発点を、文字に置いているところが大きな特色である。文字は思想を宿し、詩情を表現する。彼女が好んで使う文字は、ブラジル人詩人カルロスドルーモンアンドラーデやの詩文であるが、時には「私」というポルトガル語を限りなく連記することもある。

上西は日系3世だが、高校を出たばかりの頃、東京に3年ほど住んだことがある。その頃の印象を語った中に、こんな一文がある。

「ブラジルにいる日系人は、自分達は日本人であると思っているが、10年前日本にきた時、私は姿かたちだけが日本人であることを知った。」

これは外国で生まれ育った日系二世、三世全てに共通する想いであり、悩みでもある。外見的には父母の国の民族的特徴を備えてはいても、文化的、精神的には生まれ育った国の文化遺産をしっかりと持っているのである。自分のアイデンティティーと外見が余りに離れているような場合、どちら側に行っても中途半端な印象しか与えず、どちらからも信用されないというのが現状である。この状況は、他の民族でも同様で、植民地では普通のことであるが、わが日本民族については、他と比べ特にこの傾向が強い。こうしたことから、ブラジルに生を受けた二世、三世たちは、両国の狭間で居心地の悪い、屈折した思いに追込まれるといったことが再三あったに違いない。

芸術家を目指す上西はこうした状況の中で自分を見つめ、自分しかできない自己表現を言葉の中に見出したのではなかろうか。彼女の作品には、民族的土壌の中に逃げ込むことなく、自然界の姿を借りつつ、文字や記号を多用しながら、悩んだ末に見出した出口に向かって進んでいこうという気概が感じられる。今回名古屋とクリチーバ市で発表する新作は、200年前の江戸地図の中から、市内を流れる川をそのフォルムとし、また書き込まれた地名や家紋などを記号として、得意の連鎖形態の中に時間と空間とを表現していこうとする野心的なものである。

日系人は日本人ではないが、日本人には出来ない日本文化の翻訳者として貴重な存在であることを痛感した。

金澤 毅
美術評論家

(2008/2/18)